



|                  |   |
|------------------|---|
| Title            | 文化的営みの中で行う子育てと地域の絆  |
| Author(s)        | 本田, 光   |
| Relation         | シンポジウム「子どもの未来可能性を大切に社会の実現をめざして」 = Symposium on Expanding the Potential of Children in Future Society. 11月2日(火). 北海道大学学術交流会館, 札幌市. |
| Issue Date       | 2010-11-02  |
| Doc URL          | <a href="https://hdl.handle.net/2115/44468">https://hdl.handle.net/2115/44468</a>   |
| Type             | conference presentation   |
| File Information | 3_honda.pdf   |



## 文化的営みの中で行う子育てと地域の絆

北海道大学大学院保健科学研究院 助教 本田 光



### 1. はじめに

私が沖縄で保健師として働いてきた経験をヒントに、子育てとそれを支える地域の文化的環境との関連について、サステナビリティを考えたと思います。

平成 21 年度人口動態統計を見ると、沖縄の合計特殊出生率は 1.79 であり、全国で一番出生率の高い地域であることが分かります。

しかし図 1 を見て分かる通り、沖縄は昔から子沢山の地域ではなかったようです。全国的には戦後の高度経済成長を経験し、その頃から急激に出生数は減少しています。同時に結婚や子育てに対する価値観も多様になってきました。

一方で沖縄は、この 30 年間はアメリカの統治下であったため、本土の情勢や政策の影響を受けずに、多くの文化を残し、また新たにチャンプルー（混合）しながら独自の発展を遂げてきました。

今日は、この沖縄にあるサステナブルな文化的要素についても紹介し、今後の子育てしやすい地域づくりへ向けた、一つの方向性を提案したいと思います。

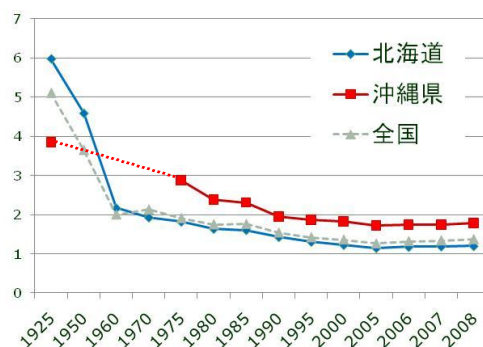


図 1 合計特殊出生率の推移  
(H22 版子ども子育て白書)

### 2. 最近の子育て事情

図 2 は、右に行くほど婚姻率が高く、上に行くほど離婚率が高い地域になります。見ての通り、沖縄は婚姻率は高く、出生率も高い地域だけれども、一方で離婚率も高い地域です。すなわち母子家庭が多い地域とも言えます。沖縄では、離婚に対して友人も親族も、本土ほどネガティブな認識を持っていません。

「それも仕方がない。」と容易に状況を受け入れることができる寛容さがあります。これも南国気質のひとつでしょうか。

次に、地域との絆として、ご近所とお付き合いの状況についてはどうでしょうか？国民生活白書（H16 版）によると、多くの子育て世代が生活している団地・集合住宅地域において約 8 割の人が「ご近所とお付き合いは、それほど、あるいは全くない」と応えています。

また子育て期は、子どもを介して人とつながりを持ちやすい世代でもあると思いますが、子どもを介したお付き合いの状況は 2000 年(45.7%)から 2007 年(32.9%)にまで減少(H19 版

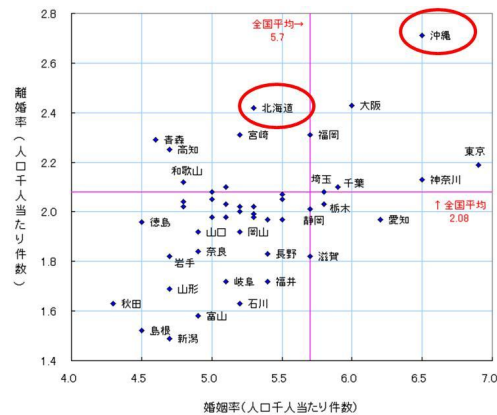


図 2 婚姻率と離婚率

国民生活白書)し、子育て環境としてのコミュニティがこの数年で激しく変化していることが分かります。最近、「公園デビュー」という言葉も聞かれなくなりました。このようなサポート機能や監視する機能を失ったコミュニティにおいて、子育てが夫婦だけのものとなり、孤立化、育児不安、そして虐待が起こっていることは、今や珍しい話題ではありません。

### 3. 沖縄・宮古島の子育て文化

宮古島には「なーふい（名付け）」と言って、子どもに名前が付いたことを祝う文化があります。昔は鎌で臍帯を切っていたために、破傷風で多くの新生児が亡くなっていたと宮古島のおばあに聞きました。つまり名前をもらえるということは、人間としてこの世に生まれて家族と親戚に、そしてコミュニティのメンバーとして迎え入れられたことを意味しています。沖縄本島では、地域の偉い老婆がザルにいくつかの名前の候補を入れて、それをガサガサ振って、ザルに最後に残った札に書かれた名前をその子に付けたという話も聞きました。

現在もこの「なーふい（名付け）」のお祝いはとても盛大です。宮古島にはこの他にも小学校入学のお祝い、高校入学のお祝い、成人のお祝いなど子どもの成長の節目には盛大なお祝いをします。このお祝いには親族・友人はもちろん、職場の同僚から、顔見知り程度の関係でも、また調べてまでもお祝いに参加します。一方で、それを迎い入れる親の方は本当に大変で、家族の一大事業でもあります。

このような文化は、子育てを夫婦だけのものとせず、コミュニティに子育てを見せる場としての意義もあります。この節目の行事があるからこそ、普段の職場の会話でも彼らの子どもの話題を皆が共有できるのです。

また、この大切な日を決めるために、地域のおばあに良い吉日を選んでもらうこともよく聞く話です。沖縄の高齢者が頼られ、大切にされるという理由が分かるエピソードです。

### 4. サステナブルな子育てしやすい地域づくりへ向けて

沖縄にあるサステナブルな文化的要素をヒントにしつつ、これからの子育てしやすい地域づくりへ向けた一つの方向性を提示したいと思います。

図3は、時代の変化に応じて変化してきたコミュニティの姿を説明しています。現代、生産のコミュニティと生活のコミュニティは分離されています。そうした時に、地域に残っているのは誰でしょうか？これからの地域づくりのキーワードはこの人達です。

内閣府「国民生活選好度調査(2005)」によると、60歳代からの高齢者は「見知らぬ子どもでも注意するなど道徳の指導」ならやっても構わないという方が40%~半数近くいます。また自分の子育てが落ち着いた40歳代~女性の25~30%近くは、「地域における子育て支援活動に参加」ができると答えています。地域にあるこのような資本を上手に活かす手段を、みんなで楽しみながら練り出し、いくつも地域に仕掛けていくことを通して、これからのコミュニティの発展に期待したいと思います。



図3 変化するコミュニティ